

越谷市文化連盟

平成12年度

『こしがや文化芸術祭』

平成13年3月4日（日）

# 越谷市郷土研究会 展示部門出品紹介

於 越谷コミュニティセンター 大ホールホワイエ

ましばやし

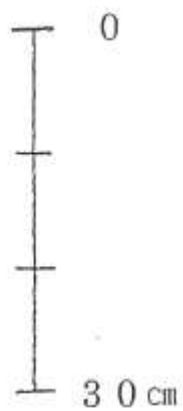
えんくうぶつ

# 増林の円空仏

加藤 幸一

# 増林の円空仏

「不動明王座像」



初公開

## 増林の円空仏（秘蔵）

加藤 幸一

越谷市増林の地元に代々秘蔵されてきた非公開の円空仏を、当会の会員の山本泰秀氏の展示依頼のご協力と所有者様の快い展示承諾のご厚意により本日に限り市民の方に特別公開する運びとなりました。所有者様と山本様に厚く感謝いたします。

この円空仏は、像高が一メートルを越す県内有数の大きさの円空仏で、他の多くの円空仏と比べると、かなりの迫力があります。

所有宅はかつては修験（しゅげん）の寺院で、この地に円空がやってきて宿泊し、寺院のひのきの太い柱を使用して彫られたと伝えられています。

昭和五十六年（一九八一）八月二十日に内藤勝雄氏（現、埼玉県立民俗文化センター所長）によって現地で行われた調査結果は次のとおりです。

名称 円空作 木造 不動明王坐像

時代 江戸時代

製作者 円空

法量 像高は一〇五・〇（座高七六・〇、台座高二九・〇）、

像幅は五二・〇、像奥は二三・〇センチである。

概要 頂上蓮を彫出し、弁髪（べんぱつ）を垂らし、右手に宝剣、左手は絹索（けんじやく）を執って盤石座上に坐す像である。

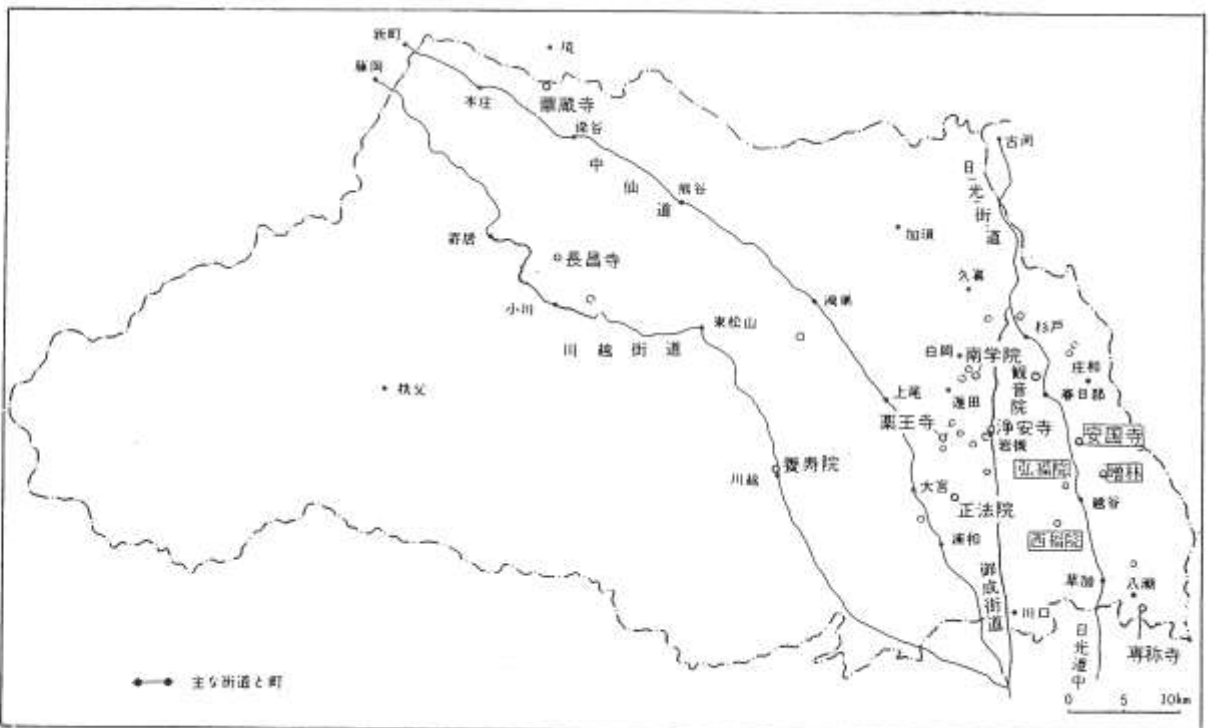
最大径五〇センチを超える桧材の木裏部に彫刻。表面は大きく平のみで仕上げ、芯は左胸前に当たっている。この木芯は底部に少し残るが、上半身は細身になるため体幹部からは外れている。左脇部は一部欠損するが当初からのものと思われる。両牙は右上、左下に向く。左牙齒脇に径一センチ程の穴があいている。背面左後に朽損部が一条深くくい込んでいる。底部に二カ所カスガイが打ち込んであるが用途は不明である。頭部がやや大きく感じるが一メートルを越す像であるため大いに迫力を感じる。

この像に関する調査結果は、昭和六十二年（一九八七）三月に埼玉県立博物館より刊行された「美術工芸品（彫刻）所在緊急調査報告書Ⅲ」の中に載っています。

なお、この円空仏の所有者のご希望により、所有者の名前は伏せさせていただきます。

## 「埼玉県の円空仏」

埼玉県には円空仏が百五十六体(平成十年三月現在)ある。その分布図をみると、大宮市・蓮田市を中心とする県東部に集中している。特に日光御成街道沿いに多く点在し、円空が日光参詣へ赴く途中に一夜の宿を借りたお礼に作られたとの話が残っている。元禄二年(一六八九)の頃と推定されている。円空仏を所有している家は、かつて修験に関係していたり、名主を勤めていた例がよくあるという。次の地図は、埼玉県の主な円空仏の分布図である。



※群馬県立歴史博物館の一九八〇年十月の第6回企画展「円空」のパンフレットに載っている分布図を元に作成。

# 「越谷市の円空仏」

越谷市の円空仏は、今回展示した増林の円空仏の他に、大泊の安国寺、谷中の西福院、大沢（北越谷）の弘福院に見られる。

## 安国寺の円空仏



《脇仏》童子形立像  
(高さ五二・二センチ)

《主尊》楊柳観音座像  
(高さ七〇・七センチ)

《脇仏》善女形立像  
(高さ五一・〇センチ)

## 西福院の円空仏

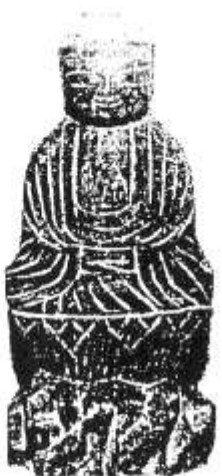


《脇仏》矜羯羅童子像  
(高さ二四・二センチ)

《主尊》不動明王像  
(高さ四七・七センチ)

《脇仏》制吒迦童子像  
(高さ二三・二センチ)

## 弘福院の円空仏



釈迦如来座像  
(高さ三六・八センチ)

※以上の円空仏の写真は、昭和四十七年八月十五日号「広報こしがや」(安国寺)と越谷市教育委員会発行「越谷市の文化財」(西福院、弘福院)から取りました。

# 円空 仏

「円空仏」とは、江戸時代前期に円空という僧侶が彫った荒削りの仏像のことである。彼は修行や説法のため各地をめぐり歩く遊行僧（雲水）で、一生のうちに十二万体の仏像を刻むことを発願したと伝えられる。

円空は、寛永九年（一六三二）に生まれた。誕生の地は、長良川近くの美濃国の「竹が鼻」（岐阜市南西の羽島市上中町）であるとされている。

寛文三年（一六六三）の数え年三十二歳の時に、山あいの長良川そばの粥川寺（岐阜市北東の美並村）で得度し、正式な僧になる。なお、茨城県笠間市の月崇寺にある観音菩薩像に「御木地主作大明神」と刻まれていることから、円空は実は美並村周辺の木地師（木工職人、匠を以て職を以てする者）の出との説がある。

寛文六年（一六六六）には、北海道の渡島半島に渡り、各地に円空仏を残している。寛文九年（一六六九）に帰郷するが、その後も大峰入り（奈良県南東部）したり、中京地域や東日本各地を遍歴するのである。元禄三年（一六九〇）飛騨国上宝村で造った今上皇帝立像の背面に「当国万仏十マ仏作已」と墨書されていることから、この時点で飛騨一万余、全国で十万余体も造仏したのかもしれない。

遍歴中、山伏的な生活を続け、米や野菜を一切とらずに木の実や果実だけを食べる木食戒を守り、一夜の宿を乞うたびに「鉈削り」（鉈彫り）と呼ばれる鑿や刃跡を残した荒削りの仏像を作ったという。

元禄八年（一六九五）に故郷に戻り、同年七月十五日に数え年六十四歳で入定した。その場所は、晩年になって住職を勤めた弥勒寺（岐阜市北東の関市池尻）そばの長良川河畔であったという。

円空仏は、昭和三十年代から四十年代にかけて、全国的に発見、発表が相次ぎ、現在までに約五千体が確認されている。大は、名古屋市の荒子観音寺にある像高が三百五十センチ余りの阿吽の二体の仁王像から、小は、同寺にある「千面菩薩」と総称された千二百余りの木こ端仏（最小は二センチ）まで大小あり、像種もさまざまである。そして丸木の原材を縦にいくつかに割り、割った面を巧みに生かして荒く鑿を入れる。一見稚拙なようだが、当時の全く形式化した作風の職業仏師たちの作に比べ、熱烈な信仰の所産だけに、新鮮な魅力を備えており、激しく心を打つものがあった。現代にも通ずる素朴な美と力強さが認められるという。

最晩年の作としては、美並村の西、洞戸村の高賀神社の円空仏があげられる。その中の一つ、歓喜天の作品には、「釜且入定也」と刻まれている。「釜」は、乾坤（天地）の坤（地）を表す。さらに釜は中国では六十四を意味する。円空は生前のうちに自分が六十四歳で地に没するだろうことを伝えたかったのであろう。